

身であり乍ら、あたふた『散華』等と言ふ名によつて不自然な死を無理強いに強いられ逃れるに逃れられず、追いつめられ追いつめられた最後のドタン場において発せられたその人の声が茲に種々様々な言葉となつて、実に生々しい状態で話しかけて来る。それではこの様に学生を押しゆがめ、追いつめ追いつめて死に至らしめたものは誰だ。いや、誰が殺したのだと言ふ所へ来て始めて本書が現代の日本人全体に読まれなければならない意義が見出されるのである。「日本人の死は外国のみが悲しむ。外国人の死は外国のみが悲しむ。どうしてこうなければならぬのだろうか。何故人間は人間で共に悲しみ喜ぶようにならないのか。」と他の一学生は叫んでいる。(後略)

宗教と道徳

浅尾 康正

(当時二年)

図書館に行つて色々な書物を漁つて内にも偶然と言いますか「倫理の探求」と言う表題の書物をめくつてみた。少し難しい言葉を並べているところが多く読みにくそうにもあつたが読んでみた。どうしてこの書物を読もうと思

いついたかと言つと、それは倫理の意義、宗教と道徳との間柄をいづらか知りたかつたからである。まず序として『倫理とはいかなるものであるか。』の所を試みた。これについて倫理とは簡単に言つて人倫の原理であり人間(ジンカン)の理法である、と述べていた。又すべての物事は一定の理法に、人間相互の関係も亦一定の理法によつて成立するものであると。次に細かく説明していたが、結局人間の考えを最終的に決定するものは常に人間自身であり、社会生活であると言ふことだ。だから倫理は何時でも倫理によつて限定されて居り、一定の論理の基礎には一定の倫理があるのだと考えられる。(後略)

全文を紹介できないのが残念ですが、当時の先輩たちが、読書を通して如何に真摯に戦争や倫理の問題と正対して、納得のいく答えを探り出そうとしていたかが伺えるのではないのでしょうか。

余談になりますが、創刊号掲載の「更級日記について」(三年鎌谷暁美)に触発を受け、八年後輩の私は大学の卒論のテーマに「更級日記」を選びました。(文責 昭和三四年全卒)

前田 晃 稔

定時制文芸誌「文窓」より (その二)



給食のパン

神田 公則
(昭和四二年定卒)

桜の花が咲く三月あわただしい春の訪れと共に我々はいよいよこの学校から追われていく

四年間食べ続けた給食ともお別れだ
給食の時間は楽しいことも苦しいこともすっかり忘れて真剣に食べたっけ

『ゾウリの裏みたいに堅いあのパン』
食べつけると案外オツなもんだとそう味わつて食べられるようになるには

『四年間通わなきゃ駄目だ』とある先輩は言つた

そして僕も四年間一生懸命食べた
そしてその結果あつてか
伸びないと思つていた身長が伸びた
そして目方も増えた
大分並の身長になつた
四年の三学期になつて
毎日給食を食べる時
過ぎ去つた四年間が
あれやこれやと思ひだされる

途中で学校を去つていった友のこ
と
クラスマッチ、社会見学、修学旅行
そして苦しかったテスト
これらはみんな楽しい思い出である

四年間めんどうみてくれた
諸先生方そして良き学友良き後輩
そして教室の蛍光灯に感謝し
こうして田川東高校定時制を
卒業できることを誇りに思う

※現在の定時制の給食は、まともな給食ですが、当時はコッペパンと牛乳だけでした。

